

研究プロジェクト 「歴史」をめぐるコンフリクト—アンデス地域の「過去」と「現在」

代表者：染田秀藤（大阪大学大学院・人間科学研究科・教授）

第3回ワークショップ

権力をめぐるコンフリクト

今回のワークショップでは、スペイン統治下のアンデスの先住民社会における権力関係の変容とそれにとまなうコンフリクトに焦点を当てます。スペイン人植民者がアンデス全土に張り巡らせた権力関係のネットワークに接合されることで、先住民社会が辿った変容の道のりを、新進気鋭の若手研究者ふたりが史料の詳細な解釈に基づいて再構成します。

日時：平成20年5月24日（土）13:30～17:30

場所：国立民族学博物館4階 大演習室（4073号室）

交通案内 <http://www.minpaku.ac.jp/museum/information/access.html>

聴講自由

◇発表者および演題◇

第1部 小山朋子（大阪大学・非常勤講師）

アンデス南部先住民共同体の権力構造にみるコンフリクト

—カピタン・デ・ミタが対峙する「スペイン的価値」と「アンデス的価値」—

ポトシのミタヨを統率するカピタン・デ・ミタは、植民地行政府が先住民共同体に設けた新たな権威職の中でも要職であった。本来の序列を無視する形でカピタンの地位に据えられた権力者は、労働に関するアンデス古来のルールとどのように対峙したのか。この疑問をもとに、チャルカス、チュクイト、ポトシの記録文書を読み解き、権力構造に生じた二つの価値のコンフリクトについて考察する。

第2部 溝田のぞみ（大阪大学・非常勤講師）

先住民訴訟に関する一考察

—17世紀ペルー・ワマンガ地方における訴訟文書を通して—

植民地時代のアンデスにおいて、先住民はスペインから導入された訴訟制度を権利主張の手段として積極的に利用した。本報告では、17世紀ペルー・ワマンガ地方における、いくつかの先住民訴訟記録に基づき、訴訟というシステムが先住民社会に発生したコンフリクトにおいていかに機能したのかを明らかにするとともに、訴訟制度が先住民社会に及ぼした影響を考察する。